

『見聞名目記』考：近世中期の写本書籍目録

勝又，基
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/10348>

出版情報：文献探究. 38, pp.83-93, 2000-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『見聞名目記』考 — 近世中期の写本書籍目録

勝又 基

『見聞名目記』は、近世中期に個人の手によって編まれた写本書籍目録である。前号（「文献探究」第三七号 平成十一年三月）ではその書誌と全文の翻刻を掲載した。今回はその解題である。論述の便宜のため、書名に関する引用には、すべて前号翻刻に冠した通し番号を付記した。併せてご参照いただければ幸いである。

1 編集意識

1. 1 書籍目録史の中で

通例「書籍目録」といえば、江戸時代を通じて広く刊行された書肆編纂による出版書目を指す。幸田成友・横山重・阿部隆一らの業績^{註1}に拠って概要を示しておけば、その始発は寛文六（一六六六）年刊の『和漢書籍目録』であり、以後享和元（一八〇一）年刊の『合類書籍目録大全』まで、増修本を含めて計二〇種あまりが刊行された。通例それらは、前期の部類わけ目録、伊呂波わけ目録、後期の部類わけ目録、の三つに分類される。

前期の部類わけ目録は、先にも挙げた寛文六（一六六六）年刊『和

漢書籍目録』をはじめとして、元禄五年刊『広益書籍目録』、いわゆる「五の目録」など、計一〇種弱が刊行される。部立ては当初二〇程度であったが、後の元禄五年目録では四十六部へと細分化された。

伊呂波わけ目録は、延宝三（一六七五）年刊『新增書籍目録』に始まる。これは江戸の地で編まれた初めての書籍目録であり、以後しばらく伊呂波分け目録は江戸で刊行されるが、後にはこれも京都が刊行の中心となる。この種は享保中頃まで続く。

後期の部類わけ目録は、享保一四（一七二九）年刊行の『新撰書籍目録』をもって濫觴とする。前期の掉尾・元禄二二（一六九九）年刊『新版増補書籍目録』から三〇年程経った時の事である。

それ以後は、宝暦四（一七五四）年刊『新增書籍目録』、明和九（一七七二）年刊『大增書籍目録』、享和元（一八〇一）年刊『合類書籍目録大全』と、散発して刊行され、江戸時代の書籍目録の歴史は終わる。享保一四年『新撰書籍目録』は「五の目録」以後に刊行されたものを主に集め、以後宝暦四年目録・明和九年目録も同様に前作から洩れたものを集める。「五の目録」と享保一四年目録・宝暦四年目録・明和九年目録、更にその後に出た書物を集めたもの

が享和元年目録である。

本稿で扱う『見聞名目記』が編集されたのは寛保三（一七四三）年である。このころ書籍目録の刊行はすでに一段落ついており、以後ぼつりぼつりと刊行される中でも、享保一四（一七二九）年『新撰書籍目録』と宝暦四（一七五四）年『新增書籍目録』とのほぼ中間にあたる、いわば書籍目録の空白期とも言って良いような時期であった。このような時期に書籍目録が個人の手によって編まれていた事は、まず宮為そのものが興味深く、また当時の出版資料としての価値も存するのではないかと考えている。

1. 2 序文と凡例

本書の編集意識を知るため、まず自序・凡例に依ってみたい。前号の翻刻とも重複するが、ここにその全文を改めて挙げておくこととする。

▽序文（原漢文。送り仮名は適宜補った。）

本朝の書卷、重山の如し。先に『書籍題林』を求む。是れ延宝第三の彫刻也。故に當寛保三に至り、凡そ凡六十九年の書、未だ記さず。且つ又た宝永・正徳の比、『書籍伊呂波目録』五卷、世に行る。然と雖も、歴年に出つ万卷、悉く皆入る事を得ず。依て今僅に見聞の書、『題林』に洩たるを紀す。尚ほ大海の一滴、九牛の一毛也。別て八八に余るの年、本朝解学の書經、通俗の軍記、勸化の仏説、雑談の解註、万卷世板に有り。今次第之を見を以て貫ぬ。唯だ是れ小童の甑び、学智の人笑を宥せ。余号けて『見聞名目記』と号す。

▽凡例（同右）

一、『書籍題林』二卷と此『名目記』と、所處見合すべき物なり。尚見を以て題林に朱を印す。

一、仏書經抄と神醫記書と通俗軍記と詩歌雜書と初に分つと雖も、未は次第不同なり。

一、（一字未読）浄瑠璃・草双紙の分は是を除く。見聞の実跡ばかりを明す。尚ほ小卷所々見合すべき事盤多也

于時寛保第三癸亥年五月初日 源誠記す

序文でまず挙げられるのは、書籍目録『古今書籍題林』の名前である。この書は延宝三（一六七五）年の刊行であり、序文が書かれた寛保三（一七四三）年から七〇年ほど遡るものである。この『古今書籍題林』以来、寛保三年の現在までの間で世へ出た書物のうち、自らの見聞したものを集めた、と言うのである。

もちろん延宝三年以後にも書籍目録は数多く刊行されている。編者もそのいくつかは実際に見ていたようだが、これらにも遺漏が多いという。

具体的な編集方法に関しては、序文に「今僅に見聞の書、『題林』に洩たるを紀す」、また凡例に「『書籍題林』二卷と此『名目記』と、所處見合すべき物なり。」とある。これより推測すれば、編者・源誠は、手に取った書物をまず延宝三年刊『書籍題林』で確認し、掲載されていないければ『見聞名目記』に書き込んだのであろう。また「尚見を以て題林に朱を印す」とある所からすれば、手に取った本で『古今書籍題林』に載るものは、そちらへ朱印を施していたようである。よって編者源誠の座右にあった『古今書籍題林』には、数多くの朱書入が存したはずであるが、残念ながら今や見ることはできない。

1・3 分類

『見聞名目記』は、「仏書儒書歴史書勸化書」（一二五項目）、「神書醫書記録書」（六二項目）、「通俗唐和軍書」（一二四項目）、「詩書歌書雜書」（一二九項目）の四部から成り、これに自著を集めた「述作下書目録」を付す。こうした部立について考えるに際し、まずは先に触れた通り関係の深い延宝三年刊『書籍題林』の分類を参考にしてみよう。

天台并当宗、俱舍宗、律宗、華嚴宗、法相宗、真言宗、禪家、僧伝并編年、浄土并一向宗、法語、儒書并經書、文集并書簡、歷代并伝記、故事、雜書、詩并連句、字書、神書并有職、曆占書、軍書、医書、仮名和書、歌書付狂歌、連歌書、俳諧書、女書、謡本付系竹書、算書、盤上書、茶湯書并華書、躰方書并料理書、名所尽、名画尽、咄本、舞本并草紙、往来書、石摺并筆道書、掛物

太字で記したのが『見聞名目記』とほぼ一致する項目である。『見聞名目記』に見えて『書籍題林』に見えないものに「仏書」「歴史」「勸化書」「記録書」等がある。もちろん『書籍題林』で各宗派に細分化されている仏書は、宗派を問わず「仏書」「勸化書」で一括りにされていると考えれば良からうが、懸隔は明らかである。

『見聞名目記』の場合、『古今書籍題林』をはじめとする多くの書籍目録のような、刊本をできるだけ広い分野に渡って網羅しようという分類にはなっていない。凡例に「浄瑠璃・草双紙の分は是を除く」と明記されているのみならず、字書、俳書、茶・華道書、往来など、採られていないジャンルは数多い。すなわち『見聞名目記』

はかなり偏った選択の書籍目録という事になるが、後にも述べるように、これこそが編者の興味の範囲であったのだろう。

2 掲出書目について

次に『見聞名目記』掲出書目の傾向などについて通覧してみる。

2・1 「仏書儒書歴史書勸化書」

本目録の冒頭に位置するのは「仏書儒書歴史書勸化書」の部である。実際には「儒書」「歴史」に比して「仏書」「勸化書」が圧倒的に多く、これらの書物が冒頭に置かれるのは、後にも述べる通り、編者源誠が僧籍にあつたらしい事と関係するものと思われる。

うち47「長明方丈記」、56「雑談集」、57「百因縁集」などの中世隨筆・説話には当然延宝三年以前の刊本があり、すでに先行の書籍目録にも載るが、何故かここで改めて掲載されている。

また、11『本朝知恵鑑』は北条団水の浮世草子だが、この部に収められているのは、注記に「團醉和尚作」とする所からであろうか。

2・2 「神書醫書記録書」

この部が最も錯雑とした印象を受ける。そもそも「神書」「医書」「記録書」を一括りとした分類が要を得ないばかりか、部立てに言う医書の類が133『薬性名寄帳』、149『農業全書』といった若干の本草関係書以外にはほとんど見ることができないなど、収められた作品も、分類に叶っているとは言い難いように思う。

146『二十一代和歌集』は後の「詩書歌書雜書」に収められるべきかと思われるが、勅撰集という事が勘案されてこちらへ収められたのであろうか。また、131『泉州志』、139『南都名所集』、140『津国

芦分船』といった地誌類もかなりの数がおさめられている。

2・3 「通俗唐和軍書」

本書の目録採集の対象となった延宝く寛保という時代がこの手の通俗軍書類が刊行された時期とほぼ重なる事もあって、この類は極めて多く収められていると言つて良いだろう。この類を集めたものに明和七（一七七〇）年刊『和漢軍書要覧』があるが、『見聞名目記』はそれに先んじ、かつ量的にも遜色がない。本書の先駆性を窺う事ができる点である。

この中にも、西鶴作の浮世草子²⁵⁹『武道伝来記』がひよっこりと顔を出している。先に見た11『本朝知忠鑑』もそうだが、編者は本書へ実際に目を通した上で、あえて各々の部類へ含めたものであるうか。疑問の残る所である。

2・4 「詩書歌書雑書」

表題には「詩書」「歌書」「雑書」という三種が挙げられているが、実際には「詩書」「歌書」は数えるほどしか無い。

「雑書」という類は『古今書籍題林』にも存したが、ここでは『鶴林玉露』『枯杭集』などの類書が集められていた。対してこの『見聞名目記』に言う「雑書」の名の下には、若干の料理書の他、数多の浮世草子類が集められている。このうち面白いのは、浮世草子がこれだけ多く採られているのに、西鶴本が僅かに、先の²⁵⁹『武道伝来記』を見るのみである事だろう。先述の通り『見聞名目記』には、先に刊行された『古今書籍題林』に漏れたものを採る、という編集方針が謳われていた。延宝三年刊の『古今書籍題林』には西鶴作の浮世草子は当然載るべくもない訳だが、それから漏れたものを採る

という方針の『見聞名目記』には、もっと西鶴作が採られても良い筈である。

3 出版規制に関する注記

本書を出版資料として考える際もつとも特記すべき事項の一つに、「絶板」「絶判」「止板」など、出版規制に関する注記が散見される事がある。江戸時代の出版規制に関しては、明和九年刊『禁書目録』^{註2}、写本『絶焼録』^{註3}という絶版に関する目録をはじめ、『済帳標目』など本屋仲間の記録類によってある程度知る事ができる。また近代に入つては、宮武外骨『筆禍史』^{註4}、蒔田稻城『京阪書籍商史』^{註5}、今田洋三『江戸の禁書』^{註6}、伊東多三郎『禁書の研究』^{註7}などに纏められている。

『見聞名目記』に出版規制に関して記載のある書物は、全部で二〇部ある。その中には先行研究が言及するものも存するが、書名が微妙に異なつて同定するのに幾分躊躇されるものや、絶版書として言及された先例を見ないものも混じつているようである。

上記の点を考慮し、出版規制に関する記述がある書物について以下に見て行く事としたい。これらの中には、秀吉に関するもの、赤穂義士に関するもの等、出版規制を受ける理由がおおよそ想定しうるものもある。便宜上まずはそれらによって大まかに分類し、その上で、個々に関する資料などを知る範囲で挙げてみたい。

3・1 豊臣秀吉関連

『太閤記』をはじめ、関ヶ原の合戦と豊臣秀吉に関する書物に対する出版規制は少なくない。

① 233 関ヶ原軍記

『禁書目録』『書本』部に「一、関原記／一、同 大全」。

写本。『日本古典文学大辞典』『関原軍記大成』の項（中村幸彦執筆）によれば、本書には「刊行の意志を示す語句も見えるが、実現せず、写本で広く読まれ」という。この項に限らず、『見聞名目記』に見える「絶板」とされる書物のうち、刊行の形跡を見ない写本は多い。

② 234 諸家前太平記

『和漢軍書要覧』（明和七刊）巻上に「諸家前太平記 十六冊

平力ナ絵入 秀吉秀次兩代諸國ノ争戦勇士ノ軍功ヲ拔^{ヌキガキス}華」。

『軍書目録』に「諸家前太平記難波戦記二同」。

刊本。本文には「太閤秀吉公立身の由来の事」などの章段がある。

『諸家高名記』（正徳四年刊）に付された巻末広告には「諸家前太平記（高名記前編／全部十三冊）近日出来／右者大坂物語とて従以前板行雖有数多そのしげきをかりもれたるを聞伝へ君恩のありがたき事を童蒙にしらしめんのみ」とある。

③ 242 浪花戦記

『禁書目録』『書本』部に「一、難波戦記数品」。

④ 250 武家童子訓

刊本。神田白龍子著。内題「古今武家童子訓」。武門の童幼の教訓の鑑とするため、武将の少年期の逸話を集めた叢伝である。漢字平仮名交じりで挿絵もあり、啓蒙的な書物である。

本書は享保三年刊（京都升屋孫兵衛他一肆）であるが、後印本（内

閣文庫本（190/179）等）の刊記は「安永三年午ノ十一月吉辰／めと木屋宗八求板」とあり、『見聞名目記』の編まれた寛保三年以後にも板木が残っている事は明らかである。

本書巻五には「豊臣秀吉公稚立の事」という秀吉を賛美する一章がある。また巻末には、「古今武家童子訓 全部十巻／板行出来不仕候故、先前編として五巻出し申候。後篇五巻追付出し可申候」との記事がある（安永求板本にも存）。

⑤ 265 東国太平記

『禁書目録』『絶板之部』に「一、東国太平記」。

『絶焼録』『絶版書目』に「東国太平記玉山点 十六」。

『筆禍史』は『文会余業』を引き、

『文会餘業』に「仙台侯へ板木買上の上絶版致候と承候」とあり、伊達政宗が豊臣秀吉に対する行動の醜態なりしを、此書に叙述されたるが為ならんかとする。

また榊原篁州『榊巷談苑』に「北越太平記、東国太平記は、紀州の宇佐美竹隠がつくりて其名をばかくしけり」とある。

所見本は宝永三年刊。漢字片仮名交じり文で、秀吉の詳細な伝より語り起こし、秀次の切腹に至る。

⑥ 298 石田軍記

『禁書目録』『絶板之部』に「一、石田軍記」。

『絶焼録』『絶版書目』に「石田軍記 十」。

山本北山『孝経楼筆記』巻四に「前太平記の作者は平山素閑といふ者、京都に住し、石田軍記を作り版行し、作者御詮議によりて京

都を出奔し、江戸へ来り居住す、正徳二年卒す年八十二歳」とある。所見本では内閣文庫本（168/184）などが刷りの早いものと思われる。別の内閣本（168/179）等は覆刻本で、それは本文の異同が見える。しかし初板にもかなり時代が下る印本とみられるもの（内閣文庫本へ168/178。168/180）などがある故、平行して行われたか。

3・2 赤穂義士もの

赤穂義士に関する書物は左に挙げる五部である。写本と刊本が混じる。

⑦ 237 内侍所

写本。『赤穂精義内侍所』『忠臣規矩順従録』などの別題がある。都の錦の手になる。

⑧ 244 介石記

『禁書目録』『書本』部に「一、介石記／一、同 追加」。

⑨ 245 忠義太平記大全

『済帳標目』に「一、太平義臣伝 忠義太平記大全 忠信略太平記 高名太平記 右四板此度絶板被為仰付仲間売買不仕連判被申下 享保」。

享保二年、京都菱屋治兵衛刊。大岸由良之助を主人公とし、漢字平仮名文で書かれた義士物である。

⑩ 280 赤穂記 大石記 実正記 退転録

『禁書目録』『書本』部に「一、新撰大石記」。

⑪ 292 大石義信伝

『禁書目録』『絶板之部』に「一、太平義信伝」。『絶焼録』『絶版書目』に「赤城義臣傳 十五」。

『済帳標目』参照。↓⑨

『筆禍史』はこの書に別名が多い事に触れ、次のように言う。

此『赤城義臣伝』、『太平義臣伝』、『赤穂義臣伝』は、いずれも片島深淵の編述（享保四年の序あり版年不詳）にして同一のものなり。只原版と翻刻本との差あるのみ（『赤穂義臣伝』は翻刻本なり）尚別に『四十六臣伝』又は単に『義臣伝』とも記せり、『文会余業』に『精忠義臣伝』とあるも、恐らくは同一のものならん、全篇十四卷或は十五卷なり、其巻尾に大議論ありて義士を推賞せり

この他にも本書には、漢字ひらがな交じり文に改められた『赤城義臣絵伝記』や、近世木活字本『赤城雪心伝』などの異本を見る事が出来る。

3・3 慶安太平記もの

由井正雪の乱について記したものの。左に挙げる二本は共に写本である。

⑫ 243 油井根元記

『禁書目録』『書本』部に「一、由井根元記」。

⑬ 272 正忠太望記

写本『寸虫大望記』を指すか。『寸虫大望記』はいわゆる「慶安太平記物」の一つ。⑫に挙げた『由比根元記』とこの「寸虫太平

記」と題するものはほとんど同じ」(『日本古典文学大辞典』「由比根元記」の項(中村幸彦執筆))であるという。

3・4 その他

上記の分類に収まらないもの、また、現存・記録を知らないものは左の通りである。

⑭ 138 都名所物語

山本泰順『洛陽名所集』(万治元年刊)を指すか。本書は別題に「都物語」があり、書籍目録には「都物語」の名でも載る。

『新修京都叢書』第十一卷(昭和四九年一月 臨川書店 野間光辰)によれば、本書には寛文四年上村次郎右衛門求版本があり、初版(板屋仁兵衛)との間に大きな本文の異同があるという。また同書によれば、父友我が泰順の嫁取資金のために偽の長崎糸荷を買入れた咎で、寛文九年に父子とも磔刑に処せられたという。そうした作者の事情が書物の刊行にも影響したものが、不明である。

⑮ 141 国家政道論

該当する書名を知らない。

⑯ 138 越後双動記

『禁書目録』「書本」部に「一、越後通夜物語／一、同 侍動記」「一、越後騒動」。

⑰ 274 北越太平記

刊本。内題・目録題等「北越軍記」。「北越太平記」は外題。宝永八年刊。謙信・信玄の争いを中心に漢字片仮名交じり文で記す。

『榊巷談苑』参照。↓⑤

⑱ 278 織田真記

享保二年序刊。所見本各題「織田真紀」。漢文で織田信長の伝を記す。諸本に享保四年瀬尾源兵衛のの奥付を付したものがあ

⑲ 281 諸家盛衰記

『軍書目録』「写本記録類」の部に「諸家盛衰記」。

⑳ 283 羽州米沢軍記

該当する書名を知らない。

4 伴祐佐の書物に関して

書名に付された注記を眺めると、次のように「祐佐」との記述が目につく。

(296) 弁慶記 五巻／祐佐作

(318) 太平百物語 前後十巻／祐佐作

(325) 風流訛軍談 五巻／祐佐作

(326) 御伽随筆 五巻／祐佐編

(335) 書本倭比事 十巻祐佐編／西川祐信図

祐佐は伴姓。「ゆうすけ」と訓する。別号菅生堂主人・恵忠居士。本業は河内屋宇兵衛を名乗る書肆であり、自ら『風流訛軍談』『太平百物語』などの浮世草子風書物も著している興味深い人物である。『見聞名目記』に載る上記の記述には、『国書総目録』などに見えぬものも存する。しかし結論から言ってしまうえば、残念ながらそれらは河内屋宇兵衛の蔵版目録から採ったもので、『見聞名目記』独自の情報とは言えないようである。

河内屋宇兵衛の蔵版目録は、朝倉治彦監修『近世出版広告集成』^註などにも載らないゆえ紹介しておく、今のところ二板が確認できた。

一つは大阪府立中之島図書館『武将感状記』(324・8/26)。刊記「正徳六丙申歲仲夏上流日/浪華書舖/柏原屋清右衛門/河内屋宇兵衛」の巻末に付されたもので、「菅生堂壽梓目録」と題する二丁。四五部の書物を載せ、小書きで作者・冊数の他、若干の梗概を記す。また同館蔵『三楠実録』(請求番号324・2/4。刊記「享保六歲辛丑五月穀旦/撰者 伏見大路第二橋 畠山大全/書舖 大阪南久太郎町心齋橋筋 河内屋宇兵衛」)所載の目録は同板ながら、『萬葉伊勢物語』『兵法秘傳書』の二部を彫り加える他、若干の異同が見られる。

もう一つは東京大学附属図書館蔵『大友真鳥実記』(請求番号H20/25。刊記「享保乙卯冬御免 元文二年丁巳春正月穀旦刻成/編者 伏見第二橋 畠山泰全子/書肆 大坂心齋橋筋 河内屋宇兵衛版」)に付されたもの。「菅生堂壽梓目録」との目録題は同一であるが、明らかに別板である。三丁に七八部を掲載し、前者に比して梗概は記されないものの、作者・冊数についてはより律儀に書き記されている。

試みに後者の目録に載る書名を全て挙げ、『見聞名目記』にも採られているものを拾ってみる。該当書は太字にし、前号翻刻に冠した通し番号を記した。

孝教白文 同示蒙句解 小学句読(92) 同示蒙句解 四書鈔説(85) 慎終疏説 积親国字解 詩法要略(336) 文法要略 詩学 筌蹄 詩文国字牘 養子訓(93) 西銘示蒙解 春宵客談 三楠

実録(223) 大友真鳥実記(207) 南北盛衰記 武将感状記(295) 同後編(295) 兵法奥義書 的場指南鈔(317) 弁慶記(296) 役行者靈驗記(86) 梨窓随筆(324) 和漢弁会録(94) 勸化讀題鈔(95) 弘法大師和讃 朝昏課誦 本性正業記(103) 西方瑞応伝(96) 四帖墨妙 草書千家詩 草書千字文 前後赤壁賦 碧桐法帖 霏微帖 楷書墨妙 草書翰林 楷書大字 五柳先生伝(104) 西銘百也往来 庭訓往来 同伝内 新用文章 宝玉節用集 増燈下集(97) 医門摘要(126) 藥性名寄帳(133) 同後集(133) 痘疹大成 素問約註(127) 前後一円集 諸家名数(294) 雅筵醉狂集 堀川院艶書合 桃園集(328) 万葉伊勢物語 太平百物語(318) 同後編(318) 風流詭軍談(325) 御伽隨筆(326) 立花百瓶図(334) 同五十瓶図(334) 立花巧様式(327) 絵本誉草 画本優比事(335) 名勝山水図(338) 寸珍百人一首 同服忌令 料理初心抄(330) 同精進初心抄(331) 太和原始論抄(105) 今川手本 新選塵劫記 懷中年代記 扇計 諸礼教訓鑑(329)

「菅生堂壽梓目録」に載る七八部の内、三七部を『見聞名目記』にも認める事ができた。『見聞名目記』の編集方針で採られるべき書物はほぼ余さず採られていると言って良いであろう。

また、これらを『見聞名目記』の中で見てみると、同一箇所に集中して掲載される傾向が見て取れる。例えば「仏教儒書歴書勸化書」の部の92から97は、『小学句解』『養子訓』『和漢弁会録』『勸化讀題抄』『西方瑞応伝』『増燈下集』と河内屋宇兵衛の刊本が続くし、「詩書歌書雜書」の部の324から337に至っては、左のように、小書が悉く一致している事が分かる。

『見聞名目記』		「菅生堂壽梓目録」
324	梨窓隨筆二卷／惠空作	梨窓隨筆惠空作／全二冊
325	風流誑軍談五卷／祐佐編	風流誑軍談同作／全五冊
326	御伽隨筆五卷／祐佐編	御伽隨筆同作／全五冊
327	立花巧花式五卷／原田一水翁作	立花巧花式原田一水翁／全五冊
328	桃園集前句附	桃園集前句附／全一冊
329	諸礼教訓鑑二冊	諸礼教訓鑑全二冊
330	料理初心抄五冊／吉田氏作	料理初心抄吉田氏作／全五冊
331	同精進初心抄三冊／吉田氏作	精進初心抄同作／全三冊
332	神道俗解五卷	(記載なし)
333	風流七小町六	(記載なし)
334	立花百瓶圖／五十瓶／彩色四冊	立花百瓶図彩色全二冊
335	畫本倭比事十卷／祐佐編西川祐信	同五十瓶図彩色全二冊
336	詩法要略二卷／河楽先生作	畫本倭比事全十冊／西川祐信圖伴祐佐編
337	名勝山水圖二卷／高木幸介作	詩法要略河楽先生作／全二冊
		名勝山水圖高木幸介作／全二冊

以上の通り、河内屋宇兵衛（伴祐佐）刊の書物に関しては、その多くを蔵版目録に拠っている事はもはや明らかであろう。ここでは蔵版目録の紹介も兼ねる意味で河内屋宇兵衛を例に取ったが、これ以外にも、同様に蔵版目録の類より抜き書きした箇所が存する事は充分に予想できる所である。

5 作者について

さてこの目録の編者源誠とは、どのような人物だったのであろうか。巻末に「述作下書目録」として、十二部の自著の目録を記しており、これが著者源誠を知る数少ない手がかりとなる。

その内の殆どは現存が確認されない書物である故、今はその書名から想像を逞しくする他ない。『信州善光寺物語』『信貴山靈驗縁起』『高僧傳元五釋書』『結縁佛法俗談記』等の通俗仏書、『蠅螂講釋抄』は談義本に近いものであっただろうか。また『瓶原古今志』『遠国みやげ』等は地誌、『戦国年表諸國考合記』『甲府山阜鎧』等の軍記俗談書、という事になるだろうか。こうして見ると、これらの彼の著述は、『見聞名目記』において源誠が集めて来た書物の傾向とほぼ軌を一にするものといって良いようである。源誠の目録編纂の方法は、このような述作活動の資料として、自らの心覚えという一面を強く持っていた事を見て取って良いであろう。

この中で唯一現存を確認出来たのが『瓶原古今志』で、筑波大学図書館に写本を蔵する（請求番号ネ320/107）。本書は五巻追補一卷付録一卷四冊。寛保二年自序。延享五年無名園古道子写。山城国瓶原の地誌である。

序文には次のようにある。

瓶原古今志之序

夫瓶原は往古の都地也。故に名所古跡古歌多し。好人の家に散しをひろいあわせ、五つの巻とわけ、所々名跡の過を誠し不足を補。古今の志を求て編集置ぬ。時に寛保二戌のさむ空

民間之童子 源誠

本書はある数奇者の家に取り散らしてあった瓶原に関する記録・古歌などを取り集め、訂正・補足して成ったものであるという。内題下の署名には「民間之童子富盛誌／源誠撰集記」とあり、追補巻の署名にだけ「民間之童子源誠」とのみある。これを見れば、記録類を纏めたという「好人」は名を富盛と言ひ、それを訂正・補足したのが源誠であつた事が分かる。

また巻末の識語には

右三巻一冊は法居士釈到岸房在俗の砌、好人の見書を集め寄るなり(原漢文)

とある。これも序文の記載とほぼ一致するが、集め寄せた人物の名がここでは釈到岸坊となつている。源誠の別号と認定して良いであろう。源誠が僧籍にあつた事もここから知られる。

数寄者・富盛については不明であるが、巻一「瓶原三十三所之道歌」の末に、次のような記事を見出す。

右瓶原三十三所之道歌は愚父吉沢氏富成過シ享保十七壬子年述集者也

或曰此歌芳沢氏之述作 歌所武者小路殿藤原家と去ル律師添削とも云リ

「愚父」とは、名前の類似からしても、『瓶原古今志』の原撰者である数寄者・富盛の父を指していよう。吉沢(芳沢)を姓とした事がわかる。「或曰」以下は意味が取りにくいのが、この歌が武者小路家の添削を受けた事を誇つているのである。ほかに吉沢氏に関するものでは、宝永八年二月、国分寺の庚申堂建立が「吉沢氏道春と云人肝煎にて」成つたとする記事も見える(巻三)。吉沢氏は当

地の有力者であつた事が想像される。

翻つて見るに、『瓶原古今志』の本文は、さまざまな出典を博搜している。巻五「解脱上人略記」として解脱上人こと貞慶の伝考証する段では、

興福寺已講解脱上人、貞慶伝記・長明発心集にも、本朝古徳伝とし、続けて『扶桑隱逸伝』『太平記』『笠置寺縁起』『黒谷上人伝』『大和名所記』『埃囊抄』『沙石集』『明恵上人伝』『一言芳談』

『行者用心集』『古今著聞集』『三國仏法伝通縁起』『神社考』『観音冥応集』『弥陀本願義疏』などといった書物から、貞慶に関する記事を列挙している。かような博搜を可能にする程に、本書の原撰者・吉沢富盛の手元に数多くの蔵書があつた事が思われよう。

以下は想像の範囲を出ないが、こうした蔵書を持つ吉沢氏の著述を取り集め、増訂したという源誠は、吉沢氏の蔵書をかなり自由に閲する事ができたのではないだろうか。そうした環境が備わつてこそ『見聞名目記』のような書籍目録が個人の手によって成り得たと考える事は、そう不自然ではないように思うのである。

6 おわりに

以上、『見聞名目記』について知る所を述べてきた。出版資料としての信憑性に対してはマイナス要因ばかり述べてきたようにも思われるが、妄信する事も蔑ろにする事も出来ないのがこの種の書物である。本稿が目指したのは、いわば本書使用上の注意とでも言う

べきものであり、本稿を踏まえた上で、諸賢が『見聞名目記』を活用されんことを願うものである。

註

- 1 横山重「江戸時代・書林編集の書籍目録」(『寛文十年書籍目録』
〈古典文庫、昭和三七年〉) 幸田成友『書誌学の話』(『日本書誌
学大系』7 昭和五四年五月 青裳堂書店) 阿部隆一『江戸時
代書林出版書籍目録集成』解題(昭和三七年一月二月) 昭和三八
年一〇月 井上書房)
- 2 『日本書目集成』4 (汲古書院) の影印に拠った。
- 3 『日本書目集成』4 (汲古書院) の影印に拠った。
- 4 明治四四年五月、朝香屋書店。
- 5 昭和三年、出版タイムス社。
- 6 昭和五六年 吉川弘文館。
- 7 『近世史の研究』1 (昭和五六年 吉川弘文館)
- 8 昭和五八年三月 ゆまに書房

(かつまた もとい・九州大学大学院博士後期課程)